ちいさな猫に、おおきな言葉を

第５稿

脚本　山口宗忠

【登場人物】

永田誠司（17）……高校生。演劇部部員。
東條雪音（18）……浪人生。
永田朱莉（18）……大学生。誠司の姉。
小野澤直人（17）……高校生。演劇部部員。
橘くるみ（16）……高校生。演劇部部員。

梶原正（47）……高校教師。
藤川徹（53）……校長。
水木恭子（41）……高校教師。
永田圭子（54）……誠司、朱莉の母。
磯崎耕（17）……高校生。
葛木陸（17）……高校生。

予備校の数学講師・喫茶店店員の男・吹奏楽部の女子生徒・駅員の男・警官の男・解体作業員の男・コンビニでの客の男

○ 御子柴高校・劇場・外（夕方）

夏の日。

校舎の横に、築30年ばかりの建物がある。

裏で、子猫を撫でている橘くるみ（15）。

くるみ「ねえ、暑いねえ」

と、中から拍手の音。

○ 同・同・内（夕方）

照明が落とされ、暗い。

百席ほどの座席は満席で、皆が拍手をしている。

と、照明が舞台につく。拍手が大きくなる。

舞台袖から、東条雪音（17）、永田朱莉（17）、永田誠司（16）、小野澤直人（16）、そのほか数人の部員が現れる。

舞台の中心に、雪音。マイクを持つ。

汗だくの顔で、誠司が雪音を見ている。

と、拍手が小さくなる。

雪音、音の出ないマイクに向かって、

雪　音「あー、あー」

朱　莉「入ってないよ！」

雪　音「え、入ってない？（マイクをトントンと叩き）あー、あー、ほんとだ」

雪音、マイクを観客席に投げる。

雪　音「（大きな声で）今日は来てくれてありがとう！」

拍手。

雪　音「私たち3年生は、今日を最後に、演劇部を引退します」

観客の男子生徒1「嘘だろー」

観客の男子生徒2「まだやってくれよ！」

と、入口の扉が開き、教師の梶原正（46）が入ってくる。

梶　原「おい！　もうとっくに下校時刻過ぎてんだよ！」

観客の男子生徒3「うるせえ！」

観客の女子生徒1「うるさいうるさい！」

朱　莉「最後なんだよ！」

梶　原「……」
雪　音「感謝してます、梶原先生には」
梶　原「……」
雪　音「先生が顧問で、本当に良かった」
梶　原「（ニヤリと笑って）……しょうがねえなあ」
朱　莉「よし！」
盛り上がる観客たち。
雪音、シー、と指で合図。
観客たち、静かになる。
雪　音「ありがとう、いい？　話して」
朱　莉「よ！　部長さん！」
雪　音「私は、この地球の誰よりも、この場所を愛しています。もうこれ以上のことなんて、多分人生では起こらないと思う。本当に幸せだった。ありがとう！」
拍手。
誠　司「（笑みを浮かべて）……」
雪　音「私は、これからも、この場所が、ずっとこのまま続いていくことを、祈っています！」
大きな拍手。

○同・同・外
子猫を撫でているくるみ。
と、猫がくるみから離れていき――。
くるみ「あ」

○永田家・外観
S「1年後」

○同・ダイニング（夜）
食卓に誠司（17）、朱莉（18）、母親の圭子（54）。
誠司は学生服を着ている。
圭　子「そうだ、かぼちゃの煮付けが……」
圭子、立ち上がる。

台所の奥、冷蔵庫のあるところに向かう。

朱　莉「（スマホの画面を見ながら）勉強の調子はどう？」

誠　司「調子とかないし」

圭子、誠司と朱莉の方を向いて、

圭　子「昨日食べ切っちゃったっけ？」

朱　莉「わかんない。昨日ウチで食べてないから」

圭　子「あれー？」

誠　司「姉ちゃんこそ、もうちょい勉強すれば」

朱　莉「ん？　ああ、してるしてる」

と、朱莉のスマホに着信が入る。

圭子、タッパーを持って食卓に戻ってきて、

圭　子「おととといの南蛮漬けあったの忘れてた」

朱莉、立ち上がり、

朱　莉「ちょっと出かけてくる」

圭　子「え？　今から？」

朱　莉「うん。大学の友達とドライブ。最近車買ったらしくて。一緒に乗らない？　って」

圭子、立ち上がり、

圭　子「そうだ、それなら……」

朱　莉「（遮って）お菓子とかならいらないよ」

圭　子「え？　いいのに」

朱　莉「いや……ちょっと、恥ずいし」

圭　子「……」

と、誠司が立ち上がり、

誠　司「ごちそうさま」

圭　子「え、もういいの？」

誠　司「うん。お腹いっぱい」

圭　子「南蛮漬けは？」

朱　莉「じゃ、行ってくる」

朱莉、玄関に向かう。

誠　司「夜中食べるかも」

誠司、ダイニングを出る。

○　同・誠司の部屋（夜）

誠司が入ってくる。
ベッドに倒れ込む。
仰向けになり、スマホを見る。
が、すぐに放り投げる。
寝転んだまま床に手を伸ばす。
プリントの束を掴み、眺める。
そのプリント――劇の台本。
誠司、その中の一節を音読する。

誠　司「『大丈夫です。どんどん取り壊しましょう。生徒たちは馬鹿ですから、理由なんて適当に拵えときゃいいんです。それが、長い間教師をやってきて気がついた、コツ。コツです』」

○予備校・外観（日替わり）

○同・講義室
教壇で、数学教師が授業をしている。
生徒たちが、熱心にノートを取っている。
後ろの方の席――雪音が、何かぶつぶつと呟きながら、ノートに台詞を書いている。

雪　音「『教師失格ですな（と、２人が笑う）』」

○御子柴高校・劇場・外観
「取り壊し予定　立ち入り禁止」と書かれた紙が貼られ、周囲を黄色いテープが囲んでいる。
中から、誠司と直人の笑い声が聞こえてくる。

○同・同・内
薄暗い室内。
舞台の上で、誠司と直人が向き合って笑っている。
観客席では、雪音が腕組みをして座っている。
と、舞台袖から、お面を被ったくるみが登場。
以下、芝居台詞――。

くるみ「生徒たちのことは考えないんですか」

誠　司「考えてるよ、考えてる。俺も心が苦しいんだ。本当は無くしたくない。ただ、大人の事情ってもんが……」
くるみ「（遮って）お金ですか」
誠　司「あ？」
くるみ「私、聞いてました。劇場を壊して、その土地を売り払うって。なんの利益も生まない劇場なんていらないって」
誠　司「……」
くるみ「そういうのって……本当に教育なんですか？」
誠司、くるみに近づいて、
誠　司「いいか、教えてやる」
くるみ「……」
誠　司「学校っていうのはな、社会なんだ。社会の縮図なんだよ。教会でも修道院でもない。金を稼がなきゃいけない。いらないものは、どんどん無くしていかなきゃいけない。だってそれが社会ってもんだろ」
くるみ「でも……」
誠　司「唯一教えることがあるとしたら、それは、社会ってもんが、どれだけ理不尽なとこなのか、ってことなんだよ」
と、直人が拍手をして、
直　人「それでこそ教育だ！」
くるみ「……私は、そんな仕事に誇りを持てません」
くるみ、舞台袖に消える。
直　人「……若いって、いいですねえ」
誠　司「幸せですよ、ほんとに」
雪　音「（遮って）ストップ！」
誠司、直人が動きを止める。
雪音、舞台に上がる。
誠司の方を向いて、
雪　音「違う」
誠　司「え」
雪　音「そんなんじゃないでしょ、校長は」
誠　司「……」
雪　音「生ぬるいって」
誠　司「……はい」

雪　音「え、私の言ってること、わかってる？」
くるみ「ぬるい！」
雪　音「くるみは黙ってて」
誠　司「……わかってます」
雪　音「遊びじゃないんだよ」
くるみ「しゅん……」
　　くるみ、舞台から降りる。
　　走って出口から外に出る。
雪　音「（直人に）どう思った？」
直　人「え」
雪　音「誠司の演技」
直　人「まあ、確かに、まだまだ良い人って感じで……」
誠　司「（直人に）だからわかってるって」
雪　音「なら」
直　人「でも」
雪　音「何？」
直　人「別に……悪い演技じゃなかったと思います。所詮学生の演劇だし」
雪　音「は？」
直　人「すみません、なんでもないです」
雪　音「現状把握してる？」
直　人「してますよそりゃ」
雪　音「じゃあさ」
直　人「でも！」
雪　音「……何？　言いなよ」
直　人「いや、すみません。やっぱいいです」
雪　音「言わなきゃなんもわかんないよ。私はこの演劇を成功させたい。もっと良いものにして……劇場を守らなきゃいけない。だから……」
直　人「じゃあ言いますよ！」
雪　音「……うん」
直　人「俺は、こんな演劇、意味……（ないと思ってます）」
　　と、誠司が、直人の肩を叩き、
誠　司「なあ」

直　人「何？」
誠　司「それ、本当に言う必要ある？」
直　人「……知らねえ」
誠　司「ならやめとけ」
直人、舌打ちをする。
苛立ったように、舞台を降りる。
誠　司「……」
雪　音「休憩」
雪音、舞台袖に消える。
誠　司「……」

○同・同・外
水道で顔を洗う誠司。
その横で、くるみが子猫を撫でている。
くるみ「大きくなったねー。まだちっちゃいけど」
と、誠司のもとに、直人が近づいてきて、
直　人「飯」
誠　司「ん」
くるみ「あの」
誠司と直人、顔を見合わせ、
直　人「え、どっちに聞いてる？」
くるみ「劇場って、どんな感じだったんですか？」
直　人「……」
くるみ「私、猫のおうちだとしか思えてないし」
誠　司「すごかった。これが学校だなんて、多分誰も信じない」
くるみ「へえ」
と、くるみ、猫を離す。
くるみ「良いとこに住んでるんだねー、チイちゃんは」
誠　司「……」

○同・校門
誠司と直人が、学校から外に出る。
直　人「俺は普通に間違ってると思う」
誠　司「え」

直人「いや、冷静に考えてさ、おかしいでしょ。だって卒業してんだよ、雪音さん」
誠司「ああ」
直人「浪人してんだよ。なんで俺らとこんな関わってるわけ？普通に勉強しろって」
誠司「まあ」
直人「それは俺らにも言えることだけど」
誠司「うん」
直人「俺そんな愛着ないし。正直……問題とか起こしたくない。時間の無駄だと思う」
誠司「……」
直人「所詮通過点じゃん。どうせ大学入ったら忘れんだよ。こんな演劇とか、劇場とか。そりゃ楽しかったけどさ」
誠司「……」
直人「浪人生の現実逃避なんだよ、思い出の中だけで生きてるんだって、雪音さんは」
誠司「それは違う」
直人「ん？」
誠司「違うよ、それは」
直人「お前に何がわかんだよ」
誠司「わかるだろ」
直人「意味わかんねえ」
誠司「じゃあいいよ」

誠司、学校の方に戻る。

直人「誠司さ！」
誠司「何？」
直人「お前もっと優先順位とかつけろよ」
誠司「つけてるよ」
直人「普通に不安、お前見てると」
誠司「うるせえよ」
直人「てか飯は！」
誠司「あー、まぜそば。まぜそば買ってきて！」
直人「やだね！　自分で買え！」
誠司「お前はなんでさ！」

直　人「あ？」
誠　司「なんでやめないの？　無駄だと思ってんだろ」
直　人「知るかよ」
　直人、誠司に背を向け、去る。
誠　司「……」

○ 喫茶店・内（日替わり）
　テーブル席に、誠司と雪音。
　単語帳を読んでいる誠司。パソコンを開いている雪音。誠司はあまり集中していない様子。
雪　音「どこ受けるの？」
誠　司「適当に国立行けたらいいなって」
雪　音「へえ」
誠　司「雪音さんは？」
雪　音「……受験かあ」
誠　司「他人事じゃないですよ。勉強もしてくださいって。……
　雪音さん、一応浪人してんだし」
雪　音「え、なんか急に偉そうじゃん（と、笑う）」
　と、入口のドアが開き、朱莉が入ってくる。
　キョロキョロと見回し、誠司、雪音を見つける。
朱　莉「え」
　近づき、席に座る。
朱　莉「え、なんで雪音がいんの？」
誠　司「あれ、言ってなかったっけ」
朱　莉「……うん……え、てか何この雰囲気」
誠　司「どういうこと」
朱　莉「なんかねっとりしてない？」
誠　司「は？」
　朱莉、店員の男に声をかけ、
朱　莉「あ、アイスコーヒーください」
店　員「かしこまりました」
　朱莉、誠司の方を向いて、
朱　莉「で、なんの用なの？」
誠　司「いや……」

朱　莉「え、付き合ったの？　もしかして付き合ったってこと？」
誠　司「な訳ねえよ」
朱　莉「あーよかった。見たくない見たくない。考えただけで寒気する」
誠　司「なんで」
朱　莉「え、当たり前じゃん。弟と親友だよ。え、弟と親友だよ。２人ともちっちゃい頃から知ってるんだよ。なんか……キモくない？」
誠　司「まじ？」
朱　莉「うん、キモい。え、てかまじ？」
雪　音「朱莉に頼みたいことがあって」
朱　莉「てか雪音なんだかんだ久しぶりじゃない？」
雪　音「まあ、そうかも」
朱　莉「卒業式以来？　元気だった？　やっぱ大変？　浪人って」
雪　音「……ぼちぼち」
朱　莉「いや、私には絶対無理。尊敬する」
雪　音「あのさ」
朱　莉「だって毎日勉強でしょ？」
雪　音「まあ、一応」
朱　莉「あ、そういや劇場取り壊されるんだって？　誠司に聞いたんだけど」
誠　司「姉ちゃん」
朱　莉「何？」
誠　司「雪音さんが喋ろうとしてるから」
と、店員がやってきて、グラスを席に置き、
店　員「アイスコーヒーです」
朱　莉「あ、ありがとうございまーす」
雪　音「……」
朱　莉「ああ……ごめん、何？」
雪　音「うん」
朱　莉「だからなんなの」
雪　音「……今度さ、劇やるの。私と、後輩たちで」

朱　莉「え？」
雪　音「だから、劇」
朱　莉「……うん」
雪　音「朱莉にも見てほしい」
朱　莉「ＯＢ」
雪　音「ＯＧね」
朱　莉「……うん。日程決まったら教えて」
雪　音「風刺劇をやるの」
朱　莉「……」
雪　音「劇場を守るために、味方をたくさん作らないと」
朱　莉「……」
　と、朱莉のスマホに着信。
朱　莉「もしもし……え、今から？　何時だと思ってんの……いや、行かないとは言ってないし。行くよ、待ってて」
　朱莉、電話を切り、
朱　莉「ごめん、ちょっと急用」
雪　音「うん」
　朱莉、席を立ち、外に向かう。
朱　莉「（振り返って）あ、お金」
　と、朱莉、財布を取り出し、中を探る。
朱　莉「誠司、来て」
　誠司、舌打ちをして、立ち上がる。
　朱莉のもとに向かう。
誠　司「自分で来いよ」
朱　莉「は？　誰に向かって口きいてんの」
誠　司「（舌打ちをして）……」
朱　莉「（小声で）雪音はやめときな」
誠　司「え」
朱　莉「普通の子じゃないから」
　朱莉、出ていく。
　誠司、席に戻る。
誠　司「……」
雪　音「弟にも偉そうで、笑った」
誠　司「雪音さんにも？」

雪　音「先生にも」
　　と、2人、笑う。
誠　司「あの、雪音さん」
雪　音「ん？」
誠　司「ちょっと聞いていいですか」
雪　音「うん」
誠　司「もし俺が、もし俺が、劇場が取り壊されるって話を雪音さんにしなかったら、今みたいに、一緒に……くそ、なんて言うんだろ、一緒に頑張るとか……」
雪　音「何言ってんの？」
誠　司「すみません」
雪　音「え、やっぱわかんない」
誠　司「だからもういいですって。忘れて！」
雪　音「忘れない」
誠　司「お願いですって」
雪　音「やだ」
　　と、少しの間沈黙。
雪　音「わかった、忘れるって」
誠　司「あの」
雪　音「ん」
誠　司「……よかったら、このあとご飯とか……」
　　雪音、立ち上がり、
雪　音「あー台本練り直さないと」
誠　司「……」

○雪音の家・外（夜）
　　雪音が帰ってくる。
　　雪音、扉をノックする。
　　と、扉が開く。
雪　音「帰りました」
　　雪音、入る。
　　×　　×　　×
　　その様子を、遠くから見ている誠司――。
誠　司「……」

○ 御子柴高校・音楽室（日替わり）

吹奏楽部が、練習をしている。

その様子を、顧問の水木恭子（41）が見ている。

と、扉が開く。

校長の藤川徹（53）が入ってくる。

水木、慌てたように起立する。

水　木「校長……！（と、部員たちの方を見やり）ほら、ストップ、ストップ」

部員たち、演奏を止める。

藤　川「あー、続けて続けて。ほら」

水木、指揮をしている女子生徒を一瞥する。

女子生徒、軽くうなずき、指揮棒を振る。

演奏が再開。

水　木「……」

藤　川「なーに緊張してんの。ほら、そんな姿生徒に見せちゃダメ、ダーメ」

水　木「……はい」

藤　川「あ！　そういうとこ！　そういうとこだって！」

水　木「……すみません」

藤　川「……困っちゃうね（と、おどけて口笛を吹く）」

○ 同・校門（夕方）

部活を終えた生徒たちが、ぞろぞろと出てくる。

雪音、誠司、直人、くるみが、その生徒たちにビラを配っている。

時折受け取ってくれる人もいるが、多くの場合には無視をされる。

誠　司「一緒に劇場の取り壊しに反対しましょう」

直　人「お願いします」

くるみ「受け取ってくださーい」

雪音、2人組の男子生徒――磯崎耕（17）と葛木陸（17）にビラを差し出し、

雪　音「協力お願いします」

磯崎と葛木、ビラを受け取る。

雪　音「あ、ありがとうございます」

磯　崎「え、何これ」

雪　音「実は、劇場が、御子柴高校の劇場が取り壊されることが決まってて」

磯　崎「え、そうなんすか。なあ、知ってた？（と、葛木に）」

葛　木「いや知ってるっしょそりゃ」

磯　崎「まじ？」

葛　木「お前まじなんも知らねえな」

雪　音「でも……あ、いいですか？　でも、それは生徒たちの意見を聞くこともない一方的な決定で、だから……」

葛　木「（遮って）まじ最低っすね」

雪　音「そうなんです。最低なんです。だから学生たちが声を上げることで……」

磯　崎「（遮って）声上げなきゃ！」

と、2人、大きく笑う。

葛　木「マジ応援してます」

雪　音「ありがとうございます！」

磯　崎「いや、俺の方が応援してるって」

葛　木「うるせえよ」

2人、雪音のもとを去る。

雪　音「……」

雪音、再び別の生徒にビラを渡し、

雪　音「協力お願いしまーす。一緒に考えましょう！」

誠司、去っていく2人の男子生徒を見ている。

磯　崎「（嘲笑している感じで）いってえー」

葛　木「聞こえるって」

磯　崎「暇人かよ」

葛　木「でもかわいくね」

磯　崎「いやでもきついわ。きついきつい。『一緒に考えましょう』って……（と、笑い）きついっしょ」

と、磯崎がビラをぐちゃぐちゃに丸め、投げる。

葛　木「ひっでえー」

磯　崎「いやゴミでしょ普通に」

葛　木「俺は捨てないよ。だって優しい男だもん」
　　と、磯崎、葛木の持っているビラを奪い、破る。
葛　木「おい、やめろって」
磯　崎「必要だった？」
葛　木「いやいるわけねえじゃん」
　　磯崎と葛木、笑う。
　　と、２人の前に、誠司が立つ。
誠　司「おい」
磯　崎「え、永田じゃん」
誠　司「何してんだよ」
葛　木「あ？」
誠　司「謝れよ。雪音さんに」
葛　木「なんだお前」
　　と、誠司、葛木を殴る。
磯　崎「おい」
　　磯崎、誠司の首根っこを掴む。
　　が、すぐに離す。
磯　崎「お前、こんな馬鹿だったっけ」
　　と、磯崎、立ち去る。葛木もついていく。
誠　司「……」
　　×　　×　　×
　　その様子を、遠くから見ている雪音――。

○同・教室（日替わり）
　　人気のない教室で、台本を読んでいる誠司。
誠　司「『あー、滑稽。価値のないものなのに、これが世界だ、
　　みたいな感じで執着している人間って』」
　　と、梶原が入ってきて、
梶　原「永田、ちょっといいか？」
誠　司「……はい」

○同・職員室
　　梶原に連れられ、誠司が入る。
誠　司「失礼します」

梶原、自分のデスクに向かう。ついて行く誠司。
梶原、座って、

梶　原「永田って、推薦取るんだっけ」
誠　司「大したとこ行けないですよ、俺の成績なら」
梶　原「ほー、お前もたまには客観視できるんだ、自分のこと」
誠　司「なんだと思ってるんですか」
梶原、周りで誰か聞いていないか確認し、
梶　原「（声を潜め）ビラ配りはやめとけ」
誠　司「え」
梶　原「目つけられてる」
誠　司「……」
梶　原「あの校長だ、生徒だろうと容赦しない」
誠　司「……」
梶　原「ま、もうちょっとうまくやれってこと。もっとずる賢くならないと。お前も、元部長さんもな」
誠　司「……わかってますよ」

○ 同・校庭

野球部が練習をしている。

○ 同・劇場・外

くるみが猫を撫でている。
その横で、誠司と直人がしゃがみ込んでいる。

直　人「風に殺意がなくなってきた、わかる？」
誠　司「何それ、麻痺ってんじゃね？」
直　人「まあ、そうかも」
誠　司「……」
直　人「あー、受験やべー。私立にしよっかな」
誠　司「お前がそれいうのはずるい」
直　人「……俺さ、わかったんだ」
誠　司「え？　何が？」
直　人「やってみたかったんだ、主役」
誠　司「は」
直　人「脇役ばっかだったから」

誠　司「……」
直　人「憧れてたの！　お前とか、雪音さんとかに。歓声浴びてさ、後輩泣かせたりしてさ」
誠　司「……」
直　人「ま、俺には無理だって、わかってたけど」
誠　司「……」
直　人「でも欲しかった。役名くらいは」
誠　司「……」
直　人「だからそれが演劇を手伝ってる理由！」
誠　司「そっか」
直　人「え、なんだよ、そっか、って。上から目線かよ」
誠　司「……直人がいてくれて、本当に良かった」
直　人「うるさ」
　　と、雪音が劇場から現れ、
雪　音「再開！　これで最後にするよ！」
　　直人、立ち上がり、
直　人「はーい」
　　雪音、劇場に戻る。
直　人「（誠司を振り向き）あと……5回くらい？」
誠　司「いや、もっとだね」
直　人「マジか」
誠　司「ま、練習も今日までだし」
　　と、誠司、立ち上がる。
　　誠司と直人、劇場に入る。
　　と、猫が悲しげな鳴き声をあげる。
くるみ「（猫に）大丈夫、ちいちゃんの家はちゃんと残すから」
　　くるみ、立ち上がり、劇場に向かう。
　　と、立ち止まり、振り返る。
　　猫がどこかに去っていく。
くるみ「……」

○ 同・校門（夕方）
　　出てくる誠司、雪音、直人、くるみ。
　　直人、スマホを見て、

直　人「え、もうこんな時間？」
誠　司「何？」
直　人「塾。授業始まっちゃう」
誠　司「今日くらいいいじゃん」
直　人「（真顔で）俺は両立できる男になる」
　　直人、走って去る。
誠　司「なんだよ」
くるみ「あ、私も」
雪　音「くるみ1年でしょ。もう塾とか行ってんの？」
くるみ「デートでーす」
誠　司「え、彼氏いんの？」
くるみ「マッチングアプリで会った25歳無職と会いまーす」
　　と、くるみ、走って去る。
雪　音「え」
　　くるみ、振り返って、
くるみ「嘘だよーん」
雪　音「……どういうこと？」
誠　司「（笑って）わかるわけないじゃないですか」
雪　音「怖い。意図がわかんない」
誠　司「（笑って）……」

○ 雪音の家・外（夜）
　　やってくる誠司と雪音。
　　真っ暗な家。
雪　音「じゃ」
誠　司「あの」
雪　音「何？」
誠　司「ひとりですか？」
雪　音「え？」
　　と、誠司、家に視線を向ける。
誠　司「真っ暗だから」
雪　音「……まあ、ひとり暮らしみたいなもんだし」
誠　司「え」
雪　音「何？」

誠　司「いや……」
雪　音「はっきりしなって」
誠　司「あの……ご飯、食べません？（と、雪音の家を一瞥）」
雪　音「え、うちで？」
誠　司「はい」
雪　音「嫌だよ、散らかってるし」
誠　司「気にしないですよ、全然」
雪　音「それに」
誠　司「……」
雪　音「ううん、なんでもない」
誠　司「……」

○同・リビング（夜）

キッチンでパスタを作っている雪音。
緊張した面持ちで、席についている誠司。

雪　音「辛いのいける？」
誠　司「あ、はい」
雪　音「じゃあ激辛にしよ」

×　×　×

ソファーに並んで座っている誠司と雪音。
誠司、水をがぶがぶ飲んでいる。

雪　音「ごめん、普通の人の基準わかんないから」
誠　司「（むせながら）人死にますって。もはや凶器です」
雪　音「ひど」
誠　司「美味しかった、ですけど、でも……（と、むせる）」
雪　音「（笑って）……」

誠司、水を飲む。コップが空になる。

雪　音「水持ってくるから」

雪音、立ち上がる。
キッチンの冷蔵庫に向かう。

誠　司「雪音さん」
雪　音「（振り返り）ん」
誠　司「嬉しかった。信頼してくれてるみたいで」
雪　音「うん」

誠　司「俺、頑張ります。劇場は、みんなの居場所だから」
雪　音「……ありがと」
誠　司「……」
雪　音「……」
誠　司「すみません、氷多めで！」
雪　音「（笑って）……」

○ 同・外（夜）

出てくる誠司と雪音。

誠　司「楽しかったです」
雪　音「よかった」
誠　司「本当は受験勉強すべきだったかもしれないけど……でも、一生で一番の夏でした」
雪　音「あ、そっちか」
誠　司「いや、今日も……今日もすごい楽しかった」
雪　音「……ここはさ」
誠　司「……」
雪　音「ここはさ、私の家じゃないの」
誠　司「……」
雪　音「知り合いの家。住ましてもらってる」
誠　司「……」
雪　音「私には、自分の家がない」
誠　司「……」
雪　音「ごめん、もう遅いね」
誠　司「じゃあ、だから雪音さんは……」
雪　音「寝よ、明日本番だし」

と、雪音、立ち去る。去り際に、

雪　音「おやすみ」
誠　司「……おやすみなさい」

×　×　×

その様子を、遠くから見ている葛木――。

○ 永田家・玄関（夜）

誠司が帰ってくる。

と、朱莉が階段を降りてくる。酔っ払った様子。

朱　莉「遅いじゃん。高校生でしょ」

誠　司「うるせえよ」

朱　莉「デート？」

誠司、答えずに階段を登ろうとする。

朱　莉「知ってる？　雪音の噂」

誠　司「（振り返り）……」

朱　莉「家出して、いろんな男の家に寝泊まりしてるって」

誠　司「……」

朱　莉「予備校代も、その男たちに出してもらってるらしい」

誠　司「……」

朱　莉「ま、気持ちはわかるけどね。雪音の家、すごい大変だったらしいし。そりゃ逃げ出したくもなる。でも……」

誠　司「寝る。明日早いし」

誠司、階段を登る。

○同・体育館・内（日替わり）

始業式。寿司詰めになり、体育座りをしている生徒たち。ガヤガヤと騒がしい。

校長の藤川が、壇上に上がる。

と、隅に立っている水木が、マイクを持ち、言う。

水　木「藤川校長のお話です。起立」

×　×　×

ダラダラと立ち上がる生徒たち。

その中にいる誠司と直人。

誠　司「行くぞ」

直　人「おう」

誠司と直人、こっそりと抜け出そうとする。

藤川の声「あー、いいよいいよ」

直　人「え」

誠司と直人、立ち止まる。

×　×　×

壇上に藤川。下には水木。

藤　川「言ったじゃーん。ほら、座ったままでいいって」

水　木「……はい」
藤　川「（生徒たちに）ほら、座りなって。クソ暑いんだから。倒れちゃったらどうすんの」
　生徒たち、だらだらと座る。
藤　川「……俺はさ、高校生の頃、校長の話ってのが一番嫌いだったの。だってだるいじゃん。長いし。くっそつまんない。だからずっと寝てた」
×　×　×
　誠司と直人が、周りに合わせて座る。
直　人「どうする？」
誠　司「でも行くしかない」
　と、誠司、座ったまま人を掻き分け、その間をすり抜けていく。
直　人「（ため息をついて）……」
×　×　×
　静かな生徒たち。
藤　川「え、笑うとこだよ、笑うとこ……あれ、みんな夏休み後なのにまじめちゃんなの？　はっちゃけてないの？　笑わなきゃ、ほら！」
　笑わない生徒たち。
藤　川「……」
×　×　×
　体育館の入り口。
　誠司と直人がこっそりとやってくる。
梶原の声「おいお前ら」
　誠司と直人、その声に振り返る。
誠　司「すみません、ちょっとトイレ」
梶　原「……仲良く2人で？」
誠　司「……」
梶　原「まあ、仲良いのは良いことだよなあ」
誠　司「……」
梶　原「お前らが何企んでるかは知らないが」
誠　司「……」
梶　原「漏らすなよ」

誠　司「（ニヤリと笑い）……」
　誠司と直人、出ていく。
　その様子を、遠くから見ている葛木――。

○同・同・放送室・内
　体育館の舞台を見下ろすような場所にある一室。
　男子生徒がひとり席についている。
水木の声「それでは、校歌の斉唱です。起立」
　と、男子生徒、ボタンを押す。
　校歌が流れ始める。
　と、扉が開く。雪音が入ってくる。
男子生徒「え」
雪　音「水木先生が呼んでる。なんか……予定変更だって」
　と、男子生徒、立ち上がる。
男子生徒「なんだろ」
×　×　×
――放送室・外。
　出てくる男子生徒。
　と、鍵が閉まる音がする。
男子生徒「え」
　男子生徒、扉を開けようとする。
　が、開かない。
×　×　×
――放送室・内。
　席についている雪音。
雪　音「（深呼吸をして）……」

○同・同・外
　誠司と直人が走っている。
直　人「てか校長は長話しするもんだろ」
誠　司「しないのが受けると思ってんの」
直　人「うわ、マジでおっさん」
　と、誠司と直人の背後から、
葛　木「どこ行くん？」

誠司と直人、振り返り、

直　人「え？」

葛　木「連れション？」

誠　司「悪い？」

葛　木「……俺もー」

誠　司「……」

○同・同・放送室

腕時計を見ている雪音。

視線を窓外にやると――舞台に立っている梶原。

水木の声「礼！」

梶　原「えー、始業式ももう終わりです。最後に進路について、まあ勉強についてですね、簡単に話します。疲れているかもしれないけど、集中するように」

雪　音「……」

○同・校舎・トイレ

誠司、直人、葛木が小便器で横一列に並んでいる。

葛　木「（直人に）出てねえじゃん」

直　人「……」

葛　木「遅漏？　あ、それは違うか」

誠　司「うるせえよ」

葛　木「……教えてよ、何するつもりなのか。企んでるんでしょ。なんか面白いこと」

誠　司「……」

直人、小便器から離れ、

直　人「急げよ」

葛　木「……え？　いいの？」

直　人「ついてこい。説明する時間ない」

葛　木「……」

直　人「遅漏で悪かったな」

葛　木「……」

誠　司「……」

○ 同・体育館・舞台袖

お面を被ったくるみがソファーでくつろいでいる。
その脇には何枚かのお面と袋。

梶原の声「特に3年生。3年生は受験が近づいています。まあ、気を抜くことはなかったと思うけど、そろそろ焦り出す時期だってことも忘れず、不断の努力を続けるように」

くるみ「……」

と、くるみがお面を取り替える。

水木の声「起立」

くるみ「……」

と、足音が近づいてくる。

水木の声「礼」

誠司、直人、葛木がやってくる。

誠　司「ごめんくるみ」

くるみ「遅いよー、……え、この前の」

葛　木「あ」

誠　司「知り合い？」

くるみ「うん。この前会った。マッチングアプリで。たこ焼きを個数分で割り勘しようとしてたから帰ったけど」

葛　木「あ、てか、結局お金……」

直　人「あんま時間ない！」

くるみ「そだそだ」

葛　木「無視？」

くるみ、袋を開ける。
誠司にちょび髭を、直人にシルクハットを渡す。
誠司と直人は慌ててそれらをつける。
と、誠司のスマホにメッセージ。
誠司、スマホを見て、

誠　司「もう出ろって！」

×　　×　　×

――同・同・放送室。
席に座っている雪音。
スマホにメッセージを打ち込み、

雪　音「行け！　誠司！」

×　　×　　×

戻って。

くるみ「晴れ舞台！」

水木の声「各クラスの学級委員に従って、教室に戻るように」

葛　木「え、なんのお面？」

くるみ「行け！　誠司！」

誠　司「呼び捨て？」

くるみ「あれ、怒った？」

誠　司「……終わったら殴る（と、笑う）」

誠司、舞台に歩き出す――。

○同・同・内

生徒たちの一部が、出ていこうとしている。

と、スピーカーから、雪音の声。

雪音の声「２０○○年。とある高校での出来事」

と、優雅な足取りで、誠司が登場。

以下、芝居台詞――。

誠　司「富、名声、力、この世の全てを手に入れた男、人間王、藤川徹。彼の死に際に放った言葉は……て、俺死んでないじゃーん。てか彼ってなんだしー」

×　　×　　×

端の方で、立ったまま舞台上を見ている梶原。

梶　原「……下手くそ」

と、梶原、その場を立ち去る。

×　　×　　×

と、お面を被ったくるみが登場。

くるみ「校長、心の声が漏れてます」

生徒たちが、キョトン足を止め、劇に見入る。

誠　司「え、まじ？」

くるみ「あと、流石に人間王はダサいです」

誠　司「ええ？　言っちゃう？　そんなこと？」

×　　×　　×

席に深く腰掛け、舞台上を見ている藤川。

その脇には水木。

水　木「やめさせます」
　　藤川、手で制し、
藤　川「わかってないなあ、水木ちゃんは」
　　と、生徒たちの大爆笑。盛り上がり。
水　木「しかし……」
藤　川「見てなって」
水　木「……」
藤　川「（ニヤリと笑って舞台を見つめ）……ま、頑張ってね」
　　×　　×　　×
　　舞台にシルクハットを被った直人が登場。
　　直人、コンコン、とノックする身振りをとり、
誠　司「どうぞー、俺今不機嫌だけど、どうぞー」
直　人「失礼します」
誠　司「あ、マジで入ってきた」
　　くるみ、誠司の肩を叩き、
くるみ「校長、田中社長です」
誠　司「え？……あ、失礼、大変失礼いたしました！」
　　と、誠司、土下座。
直　人「顔を上げてください。校長」
誠　司「そんな、わたくしめが……」
直　人「いやー、謙虚なお人だ！（と、笑う）」
　　誠司、顔を上げて、
誠　司「あのお話でしょうか？」
直　人「ええ。あの土地の話です」
誠　司「では……」
直　人「会議は通したんですよ」
誠　司「……」
直　人「（ニヤリと笑い）決定しました、買い取ることに」
誠　司「はあ……！」
直　人「まあほとんど私の独断ですがね」
誠　司「では……」
直　人「ええ、校長、任せましたよ。とっとと取り壊してくださ
　　い。あの、オンボロで、なんの価値もない劇場を」
誠　司「……お任せください」

×　　×　　×

大笑いしながら、その様子を見つめている藤川。
その横に立つ水木。

水　木「校長、いくらなんでも……」
藤　川「水差すなって」
水　木「しかし……」
藤　川「そんなに止めたいなら、止めたらいいじゃん。やってみなよ。できるって。ほら、水木ちゃんはベテランだし」
水　木「……」

○同・同・放送室
マイクを握っている雪音。
雪　音「ここから、私たちの闘いは始まる」

○同・同・内
女の子のお面を被り、舞台に立っているくるみ。
手には、お面をもう1枚持っている。
くるみ「えー、でも私興味ないしー、てか劇場って何ー？　使ってんのも見たことないしー」
くるみ、お面を男のものに交換し、
くるみ「（低い声で）猫が……住んでる」
くるみ、お面を交換。
くるみ「えー、猫？　かわいいー、見たことないけど、でもかわいいー」

○同・同・舞台袖
タオルで汗を拭っている誠司と直人。
その傍らには葛木。
くるみの声「（低い声で）貴様は猫の何を知っている」
直　人「わかってたけど、3人はきつい」
誠　司「終わったらくるみに奢らないと」
直　人「つけあがるぞ、くるみ」
くるみの声「知ってるよ、鳴き声がかわいくてー、で、しっぽがかわいくてー、でー、えーっとー、えーっとー」

と、葛木、直人に耳打ちをして、

葛　木「処分くらうぞ、こんなことしてたら」

直　人「その時はその時だよ」

と、誠司がその場を離れる。

誠　司「あれ、扇子……」

誠司、くるみが持ってきた袋を探る。

×　　×　　×

お面を付け替えているくるみの姿。

×　　×　　×

葛　木「そういやさ、見ちゃったんだ、俺。永田が、あの女の……先輩？　の家から出てくるとこ」

直　人「……」

葛　木「いいよなあ。先輩って。なんかエロい」

直　人「……」

葛　木「あ、もしかして知らなかった？」

直　人「……」

と、直人のもとに、誠司がやってきて、

誠　司「直人、扇子！　扇子見てない？」

直　人「……」

誠　司「やばい、もう時間ない……」

直　人「俺は！」

誠　司「何？　後で聞く！」

直　人「俺は……オマケなの？」

誠　司「え」

直　人「金魚のフンなのか？　俺は」

誠　司「……」

○ 同・同・内

舞台上でしゃがみ込んでいるくるみ。

猫の鳴き真似をする。

が、観客の反応は薄い。

くるみ「遅いよー」

○ 同・同・放送室

雪音が、小窓から、体育館の様子を眺め見ている。
視線の先――舞台上にひとりいるくるみと、静まり返った生徒たち。しらけたムード。

雪　音「……何してんの」

○同・同・舞台袖
誠司と直人が向き合っている。
その様子を、少し離れた場所で見ている葛木。

誠　司「なんだよそれ」
直　人「そうじゃん、俺はずっと脇役だけ。大した役なんてやったことない。セリフがなかったことだってある。でも、それでいいと思ってたよ！　それで……それが俺の役割だって、わかってたから！　身の程なんてな、死ぬほどわきまえてたんだよ」
誠　司「それは……」
直　人「でも今回もそうかよ！」
誠　司「今回は違う」
直　人「は？　何が？　いつだって俺は蚊帳の外。なんも知らない、なんも教えてくれない」
誠　司「一緒にやってるじゃねえか。同じ舞台で」
直　人「だから演劇の話じゃなくて！」
誠　司「……」
直　人「今回は違うと思ってた。でも、変に期待した俺が馬鹿だった」
誠　司「……ごめん。わかんないけど、後にして。時間ない」
直　人「お前らは、いつも俺を都合よく扱う」
誠　司「お前ら？」
直　人「もういいよ」
と、直人、立ち去る。去り際に――、
直　人「ひとりでできるだろ。脇役なんていなくても」
誠　司「……」
立ち尽くす誠司。
と、葛木が歩み寄ってきて、
葛　木「どーすんの」

誠　司「……うるせえ」
　と、誠司、舞台に駆け出していく。

○同・同・内
　走って舞台に上がる誠司。
　そこには、呆然とした様子のくるみの姿――。
　ざわざわと騒がしい生徒。皆、退屈している様子。

誠　司「『おっと、何の御用かな。私のかわいい生徒たち』」
　×　　×　　×
　と、アリーナに朱莉が入ってくる。

朱　莉「……」
　×　　×　　×
　舞台を眺めている藤川。その横には水木。

藤　川「ほら、ダメになる」

水　木「……」

藤　川「教えてあげる。教師のコツ」

水　木「……」

藤　川「舐めてかかるんだよ。所詮ガキだって」

水　木「……」
　と、藤川、後ろを振り返る――その視線の先には、
　教師たちが数人。

藤　川「おい！　何ボケーっと見てんだよ！」
　教師たち、慌てて舞台に向かう。

水　木「……」
　×　　×　　×
　舞台上。
　教師たちが、ぞろぞろと舞台に上がってくる。
　乱暴に、誠司とくるみを舞台から降ろす。
　×　　×　　×

朱　莉「……」

○同・同・放送室
　呆然とした様子で、舞台を見ている雪音。
　と、鍵の開く音がする。

雪　音「……」

○同・同・内

「何あれー」などと小馬鹿にした言葉を口走りながら、生徒たちがゾロゾロと出ていく。
その流れの中――ひとりぽつんと立っている朱莉。

朱　莉「……」

と、朱莉、立ち去る。

○同・空き教室

誠司とくるみが、並んで立っている。
その前に座っている水木。

水　木「こういったことは、断じて許されるものではありません」

誠　司「……」

水　木「本校としては、厳しい処分を行うことになります」

誠　司「……」

と、扉が開く。
梶原に連れられ、雪音が入ってくる。

○同・同・外

出口から、ぞろぞろと出てくる生徒の列。

○同・空き教室

誠司、くるみ、雪音が並んで座っている。
その向かいに座る梶原、水木。

水　木「黙っていてもわからない」

誠　司「……」

水　木「（雪音に）あなた先輩でしょ。説明する責任があるんじゃないの」

雪　音「……」

水　木「馬鹿みたい。あ、もしかしてまだ自分のこと部長だと思ってる？」

雪　音「……」

水木「たまにいるんだよ、こういう人。今がうまくいってないからって、ずーっと昔の話ばっかしてさ。武勇伝？　みたいなのを、毎回、偉そうに喋って。でも全部同じ話。みんな呆れてるのに、気づかないの」

誠司「……違う」

水木「ん？　何？」

誠司「俺は呆れてなんか……」

梶原「（遮って、雪音に）なあ東條」

誠司「雪音さんは！」

梶原「お前に聞いてない」

誠司「……」

雪音「……」

梶原「お前は、部外者だ」

雪音「……」

梶原「うちの学生を巻き込むな」

誠司「だから！　そうじゃなくて！」

雪音「……」

誠司「俺は別に……自分で……」

雪音「すみません。全部私の責任です」

誠司「雪音さん、俺は……」

雪音「黙ってて」

誠司「でも……」

雪音「みんなは何も悪くありません。私が唆したんです」

誠司「……」

梶原「うん。わかった」

水木「いや、まだ何も聞けて……」

梶原「水木先生。私に任せといてください」

と、梶原、立ち上がる。

梶原「校長にはそのように説明しておく。また後日連絡する。3人とも今日は帰れ」

梶原、出ていく。

その後に続き、水木も出ていく。

誠司「……」

○ 公園（夕方）

ブランコをボーッと漕いでいるくるみ。

○ 御子柴高校・劇場・外

黙ってやってくる誠司と雪音。

雪音、中に入ろうとする。

雪　音「ついてこないで」

誠　司「……」

雪　音「ひとりでできるから」

誠　司「……いやだ」

雪　音「……」

誠　司「まだ、一緒に、やれると思うし、そのために、俺は、頑張るし、だから……」

雪　音「ごめん」

誠　司「雪音さん！」

雪　音「私はね！」

誠　司「……」

雪　音「……ずっとひとりでやってきたの」

誠　司「……」

雪　音「手伝ってもらおうと思った私が馬鹿だった」

誠　司「……」

雪　音「ありがとね、今まで」

雪音、入る。

誠　司「……」

○ 永田家・リビング（夜）

誠司が帰ってくる。

ダイニングテーブルの上には、ラップをかけられている食事の皿。

誠　司「……」

席につき、ラップを外す。

箸も持たず、むしゃむしゃと食べる。

と、朱莉が入ってきて、

朱　莉「馬鹿じゃないの？」

誠司、そのまま食べ続ける。

朱　莉「雪音とはもう会わないって、約束して」

誠　司「……」

朱　莉「誠司には、誠司の人生を生きてほしい。雪音は他人だよ。他人とかどうでもいいじゃん。だから……」

誠　司「うん」

朱　莉「よかった」

誠　司「……」

朱　莉「おかえり」

誠　司「……」

○同・外観

S　「1ヶ月と数日後」

○同・誠司の部屋（夜）

勉強机で、受験勉強をしている誠司の姿。

と、階下から、

朱莉の声「誠司。ご飯」

○同・リビング（夜）

ダイニングテーブル――美味しそうな食事が並んでいる――を囲んでいる誠司、朱莉、圭子。

朱　莉「前も言ったでしょ。模試とか別にあてになんないって」

圭　子「でもねえ」

朱　莉「でもねえって……誠司は現役だよ。伸びしろとかすごいあるんだし、勉強だけに集中すれば可能性あるって」

誠　司「……」

圭　子「そういうもんなの？」

朱　莉「そうだよ。ほら、よく言うじゃん。現役は最後まで伸びるって。もう伸びしろないんだよ、浪人生は」

誠　司「……」

圭　子「まあ……頑張るんだよ、誠司は」

誠　司「……」

○ 御子柴高校・教室

放課後。窓際の席で、静かに勉強をしている誠司。
廊下側の席では、直人も勉強をしている。
と、外から拡声器を通した水木の声。

水木の声「えー、本校の方針として、劇場への立ち入りは禁止しております。劇場内に立ち入っている人間は、速やかに、速やかに出ること」

誠司、窓の外――劇場が見えている――を見やり、

誠　司「……」

○ 同・劇場・外

劇場の前に、水木と梶原が立っている。
拡声器を持っている水木。

水　木「もし、明日以降、劇場への立ち入りが確認された場合は不法侵入と見做し、法的措置を取ることも検討します」
と、梶原が水木から拡声器を取り、

梶　原「東條、聞こえるか！　聞こえてなくても聞け！」

○ 同・劇場・内

トイレの水道で、髪を洗っている雪音。
外から拡声器を通した梶原の声。

梶原の声「めんどくさいんだよ。なんでわざわざ、なんでわざわざこんなことしなくちゃいけない？　教師は卒業後も責任を負わなきゃいけないか？　馬鹿にすんな。早く出てこい。出てきて顔見せろ」

雪　音「……」

○ 同・劇場・外

遠くから、誠司が劇場を見ている。
拡声器を持ち、話している梶原の姿。

梶　原「答えろよ、出てこいよ！　それでも……お前は俺の生徒なんだよ、ずっと……」

誠　司「……」

誠司、その場を離れる。

○ 永田家・玄関（日替わり）
誠司が靴を履いている。
と、圭子が奥から現れ、
圭　子「忘れ物ない？」
誠　司「所詮模試だし」
と、誠司、出ていく。

○ 御子柴高校・劇場・外
数人の警官が立っている。その傍らには水木。
少し離れた位置で、梶原がその様子を眺めている。
水　木「先日通告した通り、東條雪音、あなたの行為を不法侵入と見做し、ただいまより強制執行を行います。絶対に抵抗しないこと」
と、水木、警官に頭を下げ、
水　木「よろしくお願いします」
警官たちが、劇場の中に入っていく――。

○ 駅・改札前
人波に流されるように歩いている誠司。
駅員の男が、拡声器を持っている。
駅員の男「駅員の指示に従って、落ち着いて進んでください」
と、誠司、立ち止まり――。

○ 御子柴高校・劇場・外
警官に手を引かれ、雪音が出てくる。
×　×　×
――同・外。
走ってやってくる誠司。
視線を劇場に向ける――そこには雪音の姿。
誠　司「（大声で）雪音さん！」
×　×　×
足を止める雪音。
雪　音「（その声に気が付き）……」

誠　司「守れてないじゃないですか！　ひとりじゃ！」
　　と、警官が雪音の肩を叩き、
警　官「行くぞ」
　　と、雪音、警官の手を振りのける。
　　劇場に駆けていく。
警　官「おい！」
　　後を追う警官。
　　それを見て、誠司も駆け出す。

○同・同・内
　　舞台に駆けてくる雪音。
　　もう逃げ場はなく、立ち尽くす。
　　そこにやってくる警官。
　　乱暴に雪音の手を引き、連れ出そうとする。
　　と、そこに息を切らした誠司がやってくる。
誠　司「何してんの」
雪　音「……」
誠　司「やめろよ！」
警　官「はい、どいたどいた」
　　警官と雪音が、誠司の横を通る。
誠　司「やめろって言ってんだろ！」
　　誠司、警官の肩を掴む。
警　官「おい！」
雪　音「……」
警　官「離せ！　手を！」
誠　司「（雪音に）そんなに大切ですか」
雪　音「……」
誠　司「ひとりでやるしかないくらい、大切なんですか？」
雪　音「……」
誠　司「聞けよ！　なんで黙ってんだよ！」
雪　音「私は……」
警　官「おい、これ以上やったら、公務執行妨害で……」
誠　司「お前は黙ってろ！」
警　官「おい！」

誠　司「わかってるでしょ！」
警　官「離せって言ってんだろ！」
　　と、誠司、警官を殴る。
　　倒れる警官。
誠　司「……俺が、雪音さんのことを好きなことくらい」
雪　音「……」

○ 同・同・外観

○ 永田家・リビング（日替わり）
　　誠司の退学処分通知書を読んでいる朱莉。
朱　莉「……」

○ 御子柴高校・劇場
　　劇場が取り壊されている。
　　その横で、鳴き声をあげるくるみといた子猫。
　　と、作業員の男がやってきて、
作業員「（子猫に）ほら、邪魔邪魔」
　　作業員、子猫を追いやる。
　　子猫、悲しげな鳴き声を上げ、去っていく――。

○ 同・体育館
　　全校生徒と、卒業生の親たちが座っている。
　　卒業生の中に直人。在校生の中にくるみ。
　　舞台の下に立っている水木。
水　木「それでは、卒業式を挙行します」
　　舞台に上がる藤川。
藤　川「起立！」
水　木「え」
　　半数近くの生徒が立ち上がる。
水　木「あ、起立！」
　　残りの生徒も立ち上がる。
藤　川「ほら、卒業式なんだからさ、ビシッといこうよ、ビシッと、ねえ」

直　人「……」

○ コンビニ

レジ打ちをしている誠司。その向かいに客の男。

誠　司「５６３円です」

客の男、財布を開き、小銭を探す。

誠司、ふと視線を外にやる。

そこにはくるみといた子猫の姿。

子猫、去っていく。

誠　司「……」

客の男「あー、５６０円しかない」

誠　司「すみません」

客の男「ん？」

誠司、レジを飛び越え、外に駆けていく。

客の男「え？」

○ 同・外

出てくる誠司。

子猫が去っていた方を見る。

子猫、道を曲がり、誠司の視界から姿を消す。

誠司、駆け出していく。

○ 御子柴高校・体育館

壇上に藤川。

藤　川「私は悲しい！　かわいい生徒たちが、卒業してしまうのが！　いっそ卒業なんて制度、無くなってしまえばいいとも思う！　なあ！　そう思わないか？　親御さん、思いませんか？　いなくなってしまう、無くなってしまう。私は、この悲しみに耐えることができない」

藤川の話が続く中――。

生徒たちの中にいる直人、視線をふと外にやる。

開いた扉の向こう側――子猫が駆け抜ける。

子猫を追うように、誠司も駆け抜ける。

直　人「……」

直人、向かいにいるくるみに視線をやる。
くるみも扉の向こう側を見ている。
くるみ、視線を直人に向ける。
ふたりの視線が合う。
直人とくるみ、同じタイミングで、外に駆け出していく――。

○同・同・劇場跡

劇場があった場所は、すでに更地になっている。
そこに立っている雪音。
と、子猫が駆けてくる。
後を追い、誠司もやってくる。
雪音、振り返り、
誠司と雪音、見つめ合う。

誠　司「……雪音さん」
雪　音「また、戻ってきちゃう。もう、何もないのに。わかってるのに」
誠　司「……」
雪　音「（涙を堪え、小さく笑って）なんでだろうね？」
誠　司「ブラックホールみたい」
雪　音「（笑って）え？　何言ってんの？」
誠　司「ほら、もう何もないし」
雪　音「そう、何もない」
誠　司「……でも」
雪　音「何？　慰めてくれるの？」
誠　司「（首を横に振り）でも、好きだったことは、ずっと忘れない。絶対」
雪　音「……うん」
と、直人とくるみがやってくる。
×　×　×
――体育館・外
出てくる梶原。劇場跡に視線をやり、
梶　原「（小さく笑って）……」
×　×　×

――戻って。

くるみ、子猫を抱きしめ、

くるみ「チイちゃーん。久しぶり、元気だった？」

誠　司「ずっと聞きたかったんだけど、なんでチイちゃん？」

くるみ「金、名誉、地位、の、チイ、です」

雪　音「何それ」

くるみ「（子猫に）でもお別れしよっか」

と、くるみ、子猫を離す。

子猫、悲しげな鳴き声をあげる。

くるみ「（子猫に）大丈夫。どこに行ったって、チイちゃんは生きていける。強い子だもんね、私は知ってる」

子猫、もう一度鳴き声をあげる。

くるみ「ほら、行け！　ここは地獄だぞ！」

くるみ、子猫の尻を押す。

子猫、去っていく。

くるみ「あー！」

直　人「頼みがあって。俺が言えた立場じゃないけど」

と、直人、ポケットから数枚の紙を取り出す。

誠　司「……」

○ 同・体育館・外

誠司、雪音、直人、くるみが、扉を開く。

中にいた人たちが、一斉に４人を向く。

その視線を感じながら、ゆっくりと、体育館の中に入っていく。その顔は晴れやかで――。

○ 道

子猫が走っている。

○ タイトル「ちいさな猫に、おおきな言葉を」

おわり